

久原文庫藏假名東鏡

文學博士 吉澤義則

漢文の日本書紀に對して、古くより假名日本紀といふがある。假名日本紀の作者が分らない所から兩紀の前後に就いての疑も有つたやうであるが

假名本は、元慶私記の説に爲讀此書日本書紀私所注出

也とあるのが事實であらう。假名書きであるが故に、私物であるが故に、作者も名を記さず、遂に

誰のものとも分らなくなつたものと思はれる、釋

日本紀時代には假名日本紀に二種あつたやうである。此の二種と現存假名日本紀との關係は暫く措

き、始めて假名日本紀の出來たのは、散文に假名を用ひることの盛になつた時代、即ち元慶に先だ

つこと遠からざる時代に出來たものでは無からうかと思ふ。竹取物語伊勢物語の出來たのも元慶前

後と考へられる、要するに漢文の日本書紀を讀み易くしようといふ企で有つたであらう。

降つて鎌倉の尼將軍政子は菅原爲長に依囑して貞觀政要十卷を假名に改めさせたといふことが、宗五大草紙に見えてゐる、これは天下の政のたすけとする爲であつたとある。

更に降つて、徳川四代將軍家綱は中野等和に命じて、東鏡を假名文に改めさせた、着手したのは萬治年中で、其の完成したのは寛文五年である、次いで寛文八年に出版せられた。中野等和の假名東鏡は周く世間に知られてゐるが、此の外に假名東鏡のあることは、未だ何にも見えてゐないやうであるから、茲に新しく發見せられた異本假名吾

妻鏡に就いて、一言紹介しようと思ふ。

昨年京都の某書肆から東鏡の假名本を久原文庫に購入した。序文もなければ、識語も無いので、誰の作とも分らなければ、何時出来たとも判然しない。序跋の無いこと、訂正の箇所が多いこと、切り粘りして書き改めてあるのも、少なくとも無いこと等は、中書本であつて、十分完成されたもので無い事が窺はれる。然し此の他に清書本は無かつたであらうかと思はれるほど、立派に装釘されてある表紙は縹色の鳥子紙、題簽は金泥下繪布目の鳥子紙で、赤絹絲がかゝつてゐる。北條本と同じく、安徳天皇に始まつて文永三年七月に終つてゐる、全部五十五卷、外に目録が一卷添うてゐる。で都合五十六冊であるべき所が、第三十三卷天福元年
文暦元年の一冊が闕けてゐるので、現存してゐるのは目録共に五十五冊である。北條本を根本として、吉川本を見合はし、北條本に闕けてゐる所、及び北條本に

有つても、其の内容がより少ない所は、吉川本の文句を以て、且は補填し、且は代用してある。代用補填の際にも、たゞ量の多少によつて取捨し、説の正否に就いて考へた形跡は見えない。要するに北條吉川二本をとり合せて、内容項目の充實した完本を獲ようとしたに過ぎないやうである。

筆者は數人あり、筆者の異なるにつれて、翻譯方針も多少違つてゐる、大體に於ては、中野等名のよりも假名本位になつてゐるが、その中でも假名を本文として、之に漢字を傍書したものと、漢字を本文として、之に假名の傍訓を施したものとある。又漢字を本文としたものゝ中にも、たゞ傍訓のみを示せるものと、傍訓を加へた上に更に注釋の添へてあるものどあるといふわけで、末梢に至ると、方針が一致してをらぬ。畢竟大體の方針を定めて、其によつて數人が翻譯もし、やがて清書もしたであらう。何の爲に少なからぬ勞力を

費して、假名文に改めたかといふ事は、固より判然しないが、その假名本位であることから察するに單に一般に読み易いやうにといふよりは、或る婦人の読みものとして翻譯されたものであらう。中野等和の翻譯は、大體に於て管聊卜の寛永版東鏡によつたやうであるが、久原本は訓み方は固より本文と寛永版によつた形跡は無い。但し北條本にも吉川本にも腰越狀中の句に、當家之重職とあるにも係はらず、當家之面目希代之重職となつてゐて、寛永版の訂正に一致してゐる。

本書の譯者が、寛永版を見たかど疑はれる點は右一箇所のみで、其の他には善惡に係はらず、全く見えないやうであるから、是は譯者が寛永版によつたのでは無く、別に典據が有つて、其に據つて書いたものでは無からうかと思ふ。譯者が寛永版を見たか否かはさて措き、本書の紙質字體等から見て、其の書寫の時代は、寛永を降るものとは

思はれないから、余は本書を以て、中野等和の翻譯以前のものと信ずる、若し本書の出所が分かつたならば、多少本書の來由に就いて、推究の緒も得られるかと思はれるが、其すらも分らないのは遺憾である。ともかく、本書の著者が吉川本を參考してゐるといふことは、種々の點で大に興味あることと思ふ。専門家の研究を切望する所以である。